

葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」

——高校国語教材としての研究——

伊 藤 葵

序章

葉山嘉樹は大正末年頃から活躍した、プロレタリア文学を代表する作家のひとりである。葉山嘉樹は、短編小説である「淫売婦」および「セメント樽の中の手紙」（大正一五年一月号の『文芸戦線』、さらに長編小説「海に生くる人々」によつて堂々と文壇デビューを飾った。特に「セメント樽の中の手紙」においては、一九七〇年代頃より高等学校の国語教材として広く教科書に採用されることとなる。なお、「セメント樽の中の手紙」のあらすじは次の通りである。

日々余裕のない生活を送っている労働者「松戸与三」は「セメントあけ」を仕事としている。セメントに塗れながら作業をしている最中、彼はセメントの樽から木の箱を発見する。仕事が終わった後、鬱憤を晴らすかのように木箱を破

壊すると、中にはボロに包まれた紙切れ（手紙）が入っていた。手紙の差出人は女工を名乗る者で、自分の恋人がクラッシュヤーに巻き込まれてセメントになつてしまったこと、セメントはどのように使われたのかを知りたい旨、この手紙を受け取ったのが労働者であれば、どうか返事をしてほしいという要望などがしたためられていた。自宅でこの手紙を読んでいた彼は、自分の子どもたちの声でふと我に返り、酒を呷りながら「へべれけに酔いたい、何もかもぶち壊したい」と怒鳴る。しかし、「細君」に一喝され、その細君のお腹に「七人目の子共を見た」という一文で物語が締めくくられる。

「セメント樽の中の手紙」の教材史について、小野牧夫の『国語・文学教育の研究』（昭和六〇年、秀英社）（八二頁）

では一九五九く六〇年においての高校全入Ⅱすべての青年にゆきとどいた教育をⅡの市民運動の高まりを受けての教材研究で、それは研究されはじめた」と述べられていた。小野によれば、検定の教科書に登場するのは、昭和四八年に学校図書から出版された『高等学校現代国語Ⅰ』（論者注―ただし、注（3）で述べる通り、論者は昭和四七年に出版されたものしか見付けられなかった）であり、その後、第一学習社『高等学校現代国語Ⅰ改訂版』（昭和五一年に刊行）、教育出版『新訂現代国語Ⅱ』（昭和五二年に刊行）、三省堂『新国語Ⅰ』（昭和五四年に刊行）と様々な教科書に採用されていく。そして、一九八〇年代に入ると筑摩書房『高等学校国語Ⅰ改訂版』（昭和六〇年に刊行）や角川書店『高等学校総合国語Ⅱ改訂版』（昭和六一年に刊行）と、さらにその採用数を伸ばし、高等学校の国語教材として確固たる位置を築いていくのである。

ここで私は、葉山嘉樹の傑作とされるプロレタリア文学「セメント樽の中の手紙」が、どのような解釈のもとに、一九七〇年代以降の高等学校国語教材として受容されていたかということに興味をもった。「セメント樽の中の手紙」を教科書で学ぶこととなった先駆者たちが、「セメント樽の中

の手紙」にてどのような学びをしていたのだろうかという疑問である。また、「セメント樽の中の手紙」の教材史について調べを進めるうちに、小野牧夫前掲書より「学校図書出版の『高等学校現代国語Ⅰ』（昭和四八年に刊行）や、第一学習社出版の『高等学校現代国語Ⅰ改訂版』（昭和五一年に刊行）には本文の部分削除や表現変更が行われていた」とがわかった。なお「セメント樽の中の手紙」は『文芸戦線』で発表された後、その話題性から様々な書籍〔1〕に収録されている。しかし、それらの本文を確認したところ文章の削除や表現変更が行われていたものは見つけられなかった。よって、教科書での改変は、著者である葉山嘉樹による加筆・修正ではなく、あくまで教科書に載せるための改変あったと考えられる。では一体、どのような文章に削除・表現変更がなされ、こういった理由からそれは起こったのだろうか。本文が改変されるということは物語自体の読み方や解釈もまた違ってくる可能性が出てくると思われる。

以上の発見や疑問を踏まえ、第一節では「セメント樽の中の手紙」が国語教材として広く採用されるようになった、一九七〇年代以降の教材としての解釈の在り方について、第二節では教科書初出時にどのような削除・表現変更が見られ、それはどういった理由から生まれたのかという考察を行う。なお、初めて教科書に「セメント樽の中の手紙」の全

文を掲載したのが三省堂刊行『新国語Ⅰ』であることから、三省堂がどのような意図から全文掲載の先駆者となったのかということについても触れていく。さらに、一九七〇年代には二度の高等学校学習指導要領の改訂があったことを確認した。このことが、全文掲載の布石となった可能性についても一考したい。そして、第三節では第一節と第二節を受けて、本文の削除・表現変更が作品の読み方に影響を及ぼした可能性を指摘する。以上の調査や考察を通して国語教材「セメント樽の中の手紙」について、今一度その教材の歴史を明らかにしたい。

一 国語教材「セメント樽の中の手紙」の読まれ方

一・一 二つの主題

「セメント樽の中の手紙」は一九七〇年代後半に検定教科書に掲載される。そして、一九八〇年代以降から国語教材としての採用数で増加の傾向を見せ、教材としての位置を安定的なものにしていく。学習の際には、その多くの場合が「セメント樽の中の手紙」の本文を大きく三段に分けて授業を進めていく。第一段は、冒頭の「松戸与三はセメントあけをやっていた」からセメント樽の中から木の箱を見つけ

女工の手紙を取り出す「彼が拾った小箱の中からは、ボロに包んだ紙切れが出た。それにはかう書いてあった。」までであり、第二段は女工の手紙、そして第三段は女工の手紙を読み終えた与三が現実の世界に戻ってくるところである。それぞれの段に注目すべき点や達成目標を設ける場合もあり、野中幸子「読みを深める討論指導―『セメント樽の中の手紙』の取り扱いの場合―」（平成三年『国語教育研究』所収）では、第一段にて三人称視点にて与三のやりきれなさや行き場のない閉塞状況、過酷な労働環境を把握する、第二段にて女工の手紙より女工の手柄や、厳しい労働を強いられていく労働者同士の連帯意識を読み取る、第三段にて手紙を読み終えた与三の心情を考察するということを目標に授業実践をしたとされていた。その他にも「セメント樽の中の手紙」を用いた授業実践の報告は様々あり、その授業の狙いとしては「現代の生（生活現実）の意味、それとまわりの世界とのかかり合いを実感としてとらえさせる」（池田容子「セメント樽の中の手紙」授業実践報告」（昭和五四年『京都教育大学国文学会誌』所収、六五頁）、「新しく美しい愛の存在とその高まりについて実感的にまた認識的に知る。現代の人間の出くわす問題性の中で人間のやさしさ、強さ、弱さについて知る。労働者の生活現実を目を向ける」（小野牧夫前掲書、八四頁）などが挙げられていた。

もちろん授業実践の報告だけではなく、「セメント樽の中の手紙」は文学作品としての研究、教材としての研究も数多くなされている。研究のテーマとしてあげられることが多いのが、「セメント樽の中の手紙」の主題についてである。言うまでもなく、作品にとつて主題は重要なものであり、主題の設定が違えば授業の指導も当然違ってくる。ここで「セメント樽の中の手紙」の主題設定について、いくつかの先行研究を紹介したい。

まず、芳賀孝雄「セメント樽の中の手紙」（昭和四四年六月『国文学』所収、六二頁）は次のように述べている。

手紙は、搾取と抑圧のなかで孤立しながら、それ故にこそお互いの団結を求め合っている労働者への連帯のメッセージである。（中略）「セメント樽の中の手紙」は、この労働者の連帯の事実を虚構化し、みごとに形象化し得た点で、作品そのものが労働者への連帯のメッセージとなることが出来た。（中略）古風な労働者である与三は（中略）自分の虐げられている現実の苦しみとみじめさの実感から、彼は同じ労働者階級の同じ環境にある女工の悲嘆にはげしく感動した。（中略）このようにして、女の悲痛な訴えは与三によつて受けとめられた。彼らの間に連帯が成立したのである。

女工の手紙は与三という特定の労働者に届いたものでは

あったが、女工の気持ちとしては日本の労働者全体への訴えであつた。そしてその思いは与三へと届き、連帯が生まれたいという考察である。また、川端俊英「セメント樽の中の手紙」の教材化」（昭和五一年二月『日本文学』所収、七四頁）では、「この作品の主題を一言にまとめて言うならば、「労働者の連帯」ということになる。したがって、指導に当たつても、この主題が学習者にとつて、いかに感動的に心象として形成されるかというところに重点が置かれるべきであろう。」と述べられており、『国語教材研究講座 高等学校現代文（上巻）小説・戯曲』（昭和五九年一月、有精堂）所収の増田修「葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」（九七頁）では「この作品の主題は加重かつ危険な労働に従事せざるを得ない下層労働者の連帯を求める叫びであり、その連帯によつて労働疎外からの解放、人間性回復を獲得しようとする願ひである。」とされている。以上の三名に共通するのは、主題を「労働者の連帯」にしているという点である。

一方、前田角蔵「セメント樽の中の手紙」論」（昭和六三年一〇月『日本文学』所収、三五頁）では次のように論じられていた。

愛という純真な意味の中に生きる女工の姿は、逆にそこから限りなく後退して生きている自己の姿を照射したはずである。（中略）「セメント樽の中の手紙」は、女

工の伝達する労働者の肉体破碎の悲劇と連帯の訴えにもかわらず、そして実際それに激しく心を揺さぶられながらも、しかし生活の厚い壁の中で身動き出来ないという一人の労働者松戸与三の姿が描かれている。

田中実『読みのアナキーを超えて いのちと文学』（平成九年、右文書院）所収の『他者』へ（五八頁）においても、『セメント樽の中の手紙』という小説は、女工の張りつめた文体の中に彼女の深い愛と連帯の訴えが託されているにもかかわらず、いや逆にだからこそその愛と連帯の訴えによって、職場と家との二重の閉塞状況にある与三がいつそう自身を解体化させていく状況を表出している。」としており、『新しい作品論』へ、『新しい教材論』へ3 ●文学研究と国語教育研究の交差』（平成十一年、右文書院）所収の大塚敏久「セメント樽の中の手紙」教材研究」（二四九、二五〇頁）でも前田氏、田中氏の考察を受けて次のように述べられていた。

「労働者の連帯」という主題は、読みという点で言えば、女工の手紙を重視しているために出てくるものである。作品に立ち返って、手紙の読み手である松戸与三を中心に読むということが、当然のことながら、考えられなければならない。（中略）女工の手紙はあくまで挿入さ

れたものであって、前後を支えている松戸与三の置かれた現実をここでは読み取るべきだと考える。

この三名に共通するのは「与三の現実」や女工の手紙を受けての「与三の在り方」を重視していることである。

その他、前掲の『新しい作品論』へ、『新しい教材論』へ3 ●文学研究と国語教育研究の交差』所収の高橋博史「セメント樽の中の手紙」（二一六頁）のように「今日までの「セメント樽の中の手紙」論を通観するとき、「プロレタリア文学」という分類が、作品の理解を妨げてきたのではないかと指摘する者もあった。「先入見を離れて女工の手紙を読んだとき、そこに「労働者としての自覚・連帯」を読み取ることはむしろ難しいのではないか。」（二一七頁）という意見である。

以上のように先行研究を複数紹介してきたが、それらのテーマが「セメント樽の中の手紙」の主題設定にあり、さらに「プロレタリア文学的枠組みを含めて女工の手紙を重視することで、労働者の連帯を示している」とする見解と「プロレタリア文学的枠組みによらない与三の世界を重視する」という見解に分かれていることがわかった。「セメント樽の中の手紙」における主題の設定の考察は長年されてきたということであるが、前述したように、主題の設定が例えば指導の在り方も違ってくる。それでは、実際の授業においては

どちらの読み方指導がなされてきたのだろうか。

一・二 学習の場としての主題

この二つの観点について中野登志美「国語科教育におけるマンガを活用した学力の育成―葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』の場合―」（平成二七年『広島大学大学院教育学研究科紀要』所収、七六頁）では次のように述べている。

本稿ではプロレタリア文学という枠組みに捉われずに『セメント樽の中の手紙』の教材的価値を検討していきたい。女工の手紙が重要ではないというのではなく、プロレタリア文学と女工の手紙を結び付けた「労働者の連帯」という読みを指導する授業実践が行われ、すでに一定の成果と課題が報告されている。『セメント樽の中の手紙』の授業実践では「労働者の連帯」と読む指導が行われていて、授業で「労働者の連帯」と読んだ際の課題が報告されている。本稿ではその課題を踏まえて、学習者が与三の現実を通して自分の現実を見つめることができるようになる指導を考案していきたい。

中野氏によれば、やはり女工の手紙に着目して女工の心情やプロレタリア文学としての読み方を学ぶ指導と、与三に着目して作品内での与三の世界の変化を学ぶ指導の二通りが実践されており、そして、どちらかと言えば前者の方が

読み方の指導として多くなされてきたとされていた。この二通りの読み方の指導の比重について、私は教科書の本文後に載っている「学習の手引き」、および教科書に対応する指導書等によつて確認を行った。なお、本論文で使用した教科書に対応する指導書の全てを入手することはできなかったため、対応する指導書が入手できなかった教科書については「学習の手引き」にて読み方の指導を考えていく。

次の学習の手引きは、学校図書出版『高等学校現代国語一』からの抜粋である。

準備

この小説で展開されている世界は、みんなのこれまでの生活体験とは、かなりかけ離れているであろう。そこで、この小説を読むことによつて新しく開かれた世界が、自分にどのようにかわってくるかということを考慮に入れながら、主人公の生活状況をノートに整理し、さらに女工の手紙から受けた感動をまとめておく。

学習A

- 一 この小説の描写の特徴を考え、話しあつてみよう。
- 二 主人公が手紙のはいった木の箱を見つけたとき、どのように反応したか、まとめよう。
- 三 次のそれぞれの表現には、女工のどんな気持ちか

表れているか、考えよう。

① そうして焼かれて、りっぱにセメントとなりました。

② このセメントをそんな所に使わないでください。いいえ、ようございます。どんな所にでも使ってください。

③ その代わり、わたしの恋人の着ていた仕事着の切れをあなただにあげます。

四 手紙を読む前とあとで、主人公の気持ちに違いがあるかどうかを考え、この小説の最後の部分がどのような意味をもっているかについて話しあってみよう。

五 四で考えたことをふまえたうえで、もう一度手紙の部分を読みなおし、作者の訴えているものを中心にした感想文を書こう。

B

一 次の傍線の語には、それぞれどんな気持ちを感じられるか、話しあおう。

① 「チエツ！やりきれねえなあ。」

② 「べらぼうめ！どうして飲めるんだい！」

③ 「あの人は優しい、いい人でしたわ。」

二 「かれの通る足下では木曾川の水が白くあわをかん

でほえていた。」の傍線部分について次の点を考えよう。

① わかりやすい表現に改めよ。

② この表現には、どんな特徴が見いだせるか。

③ これと同じような特徴をもった表現を、本文中から一二箇所書き出せ。

このように、国語教科書には作品本文の後に、内容が理解できているかの確認のためのいくつかの設問、いわゆる「学習の手引き」が示されている。全ての教科書の「学習の手引き」を比較したところ、教科書の出版社によって表現の仕方に差はあれどもその内容自体に大きな差は見られなかった。前述の学習の手引きを例にしてみると、確かに女工の手紙に関する問いが多いように感じられる。しかし、学習Aの四には、「手紙を読む前とあとで、主人公の気持ちに違いがあるかどうかを考え、この小説の最後の部分がどのような意味をもっているかについて話しあってみよう。」と記述されており、与三の変化にも触れられていることがわかる。教科書会社によって学習の手引きの内容に大きな差はなかったと前述したように、ほとんどの教科書に与三が手紙を読む前後での変化について触れる記述があった。これでは、「女工と労働者の連帯」と「与三の現実や変化を読む」が授業でどのような比重であったのかはつきりとしえない。

それでは、指導書ではどうだろう。いくつかの指導書（後掲の表2）を確認したところ、驚いたことに、その全ての指導書の主題に「女工から労働者への連帯を学ぶ」という旨が記載されていた。『高等学校現代国語…教授資料』（昭和五十一年、学校図書、三四〇頁）の主題を例にあげると「被抑圧階級として現実の中に生きている労働者に対して、同じ階級に属している立場から連帯を呼びかけ、そこに労働者の生存のよりどころを求める女工の心情。」とされており、『最新現代国語…教授資料』（昭和五五年、教育出版、一〇頁）でも「底辺に生きる人間の、過酷な現状への悲憤と抵抗は、やがて人間の尊厳の自覚と、愛の連帯へと次第に輪をひろげる」と論じられていた。その他の指導書においてもこの見解に相違は見られなかった。すなわち、あくまでも主題は「女工と労働者の連帯」に重きが置かれていたということである。なお指導書を比較したところ、時代が進むにつれて「与三の現実や変化を読む」ことの取扱いが少し深まったとともとれる部分が発見された。これについては第三節にて論じたい。ここでは、全ての指導書において「女工と労働者の連帯」が主題のほとんどを占めていたという確認に留めておく。

また、指導書の比較で興味深かった点として「与三の現実や変化を読む」ことについての解釈が様々であったという

ことがある。女工の手紙を読んだ後の与三の描写（本文での第三段）は分量にして六行のみである。そこに与三の詳細な心理描写はなく、最後は「彼は、細君の大きな腹の中に七人目の子供を見た。」と締めくくられる。読み手によって解釈の幅が出るラストであるが、それは指導書においても同様であることがわかった。『総合国語Ⅱの研究』（昭和六十一年、角川書店、四四一、四四二頁）では次のように論じられている。

与三は、そこに「へべれけに酔っ払」うこともできない生活の現実を認識させられたというだけではない。与三は同時にこれから産まれる子供のこと——自分たちの将来のことを考えたわけである。（中略）ここは、「七人」と明示することによって、現実が鮮明、明白に与三の眼前に浮かんだことを印象づけようとした、ととるべきだろう。

また、『国語Ⅰ…高等学校用…学習指導の研究』（昭和六三年、筑摩書房、五四頁）において、

子供のことを考えたら、ひたすら働くことしかない、閉塞的状态が、端的にとらえられている。与三は、しかし、いま新しい労働者を細君の腹の中に見たと考えることも出来る結末である。こう考えると、「七人目の子供」は「恋人」の生まれかわり、とも想像できる。

とされる一方、『高等学校新国語Ⅰ：指導資料』（昭和六三年、大修館、四七頁）では、

与三は七人めの子供を抱えての現実生活を、細君に
いわれるより先によく自覚している（中略）「細君の腹
の中の七人めの子供」をどのように見るかについては、
「与三」と「読み手」できちんと区別しておきたい。与
三は決して、その子供が、死んだ恋人の生まれ変わりな
どとは思っていないだろう。

と論じられていた。三社の指導書を見るだけでも、第三段、特に「彼は、細君の大きな腹の中に七人目の子供を見た。」の一文の取扱いが様々であることがわかる。このように、「与三の現実や変化を読む」ことに焦点を当てた場合、その読み方に大きな幅が生まれる。その解釈について、授業内で生徒同士が意見を交えることができれば、それはそれとして有意義な授業となるだろう。しかし、それを主題とするとなると、一貫した授業というのは難しくなる。一方、主題を「プロレタリア文学」「女工と労働者の連帯」におけば、「プロレタリア文学」がどういったものであるか、当時の時代状況はどういったものであったのか、という知識が吸収でき、作品の主題が分かりやすい一貫した授業ができるだろう。先行研究を調べる中で、「プロレタリア文学」という枠組みについての有無を検討し授業をするという試み^②や、中野

氏のような「女工と労働者の連帯」以外の読み方で授業実践するという文献もあった。しかし、スタンダードとしては「プロレタリア文学と女工の手紙を結び付けた「労働者の連帯」という読みを指導する授業実践が行われ」（中野登志美前掲論文、七六頁）てきた背景には、そういった要因があったのではないだろうか。

二 教科書中での本文削除・表現変更

二・一 失われた「最良の本文」

続いて、教科書中の本文削除・表現変更について調べていきたい。小野牧夫前掲書より「学校図書出版の『高等学校現代国語Ⅰ』（昭和四八年に刊行）や第一学習社出版の『高等学校現代国語Ⅰ改訂版』（昭和五一年に刊行）には本文削除や表現変更が行われていた」ということがわかっている。これについて著者の指摘があつた教科書を調べたところ、『高等学校現代国語Ⅰ』^③と『高等学校現代国語Ⅰ』の同様の箇所に表示変更が見られた。初出である『文芸戦線』では該当箇所について次のように記述されている。

『チェッ！やりきれねえなあ、嬢は又腹を膨らかしやがつたし、……』彼はウヨウヨしてる子供のことや、又此寒さを目掛けて産れる子供のことや、滅茶苦茶に産

表 1 高等国語教科書における本文異同の有無

発行年	発行者	書名	異同の有無
1972(S.47)	学校図書	高等学校 現代国語一	有
1975(S.50)	学校図書	高等学校 現代国語一 改訂版	有
1976(S.51)	第一学習社	高等学校 現代国語 1	有
1977(S.52)	教育出版	新訂 現代 国語 2	有
1979(S.54)	三省堂	新国語 I	無
1980(S.55)	教育出版	最新現代国語 2	有
1982(S.57)	学校図書	高等学校 国語 I	有
1982(S.57)	三省堂	新国語 I	無
1985(S.60)	学校図書	高等学校 国語 I 改訂版	有
1985(S.60)	三省堂	新国語 I 改訂版	無
1985(S.60)	筑摩書房	高等学校用 国語 I 改訂版	無
1986(S.61)	角川書店	高等学校 総合 国語 II 改訂版	無
1988(S.63)	学校図書	高等学校 国語 I 新版	有
1988(S.63)	三省堂	新国語 I 三訂版	無
1988(S.63)	大修館	高等学校 新国語 1	無
1989(S.64/H.元)	筑摩書房	高等学校用 国語 I 二訂版	無
1989(S.64/H.元)	角川書店	高等学校 総合 国語 II 三訂版	無
1990(H.2)	学校図書	高等学校 国語 I 改訂版	有
1991(H.3)	三省堂	新国語 I 四訂版	無
1991(H.3)	大修館	高等学校 新国語 1 改訂版	無
1992(H.4)	角川書店	高等学校 総合 国語 II 四訂版	無
1992(H.4)	第一学習社	高等学校 新国語二 四訂版	無
1994(H.6)	学校図書	高等学校 国語 I	有
1994(H.6)	大修館	高等学校 新国語 1	無
1995(H.7)	角川書店	高等学校 国語 2	無
1995(H.7)	第一学習社	高等学校 新編 国語二	無
1998(H.10)	大修館	高等学校 新国語 I 改訂版	無
1999(H.11)	角川書店	高校生の国語 2	無
1999(H.11)	第一学習社	高等学校 改訂版 新編国語二	無
2003(H.15)	大修館	国語総合	無
2007(H.19)	大修館	国語総合 改訂版	無
2007(H.19)	筑摩書房	国語総合 改訂版	無

む嬢の事を考へると、全くがっかりしてしまった。
この部分について、確認を行った教科書では次のように記述されていた。

「チエツ！やりきれねえなあ。」かれはうようよして
る子どものことや、またこの寒さをめがけて生まれる
子どものことを考えると、全くがっかりしてしまつた。
細かな違いではあるが、与三の家族に対する暴言や悪態
(特に「嬢」に向けたもの)が軽減されていることが分かる。
さらに、昭和二四年から平成一八年までの高校国語教科書

に収録された作品を掲載する阿武泉編著『教科書掲載作品
13000』⁴⁾(平成二〇年、紀伊國屋書店)より「セメン
ト樽の中の手紙」が掲載された教科書⁵⁾を確認した。確認
した教科書は表一の通りである。

すると前述した教科書以外で、これまでには指摘をされ
てこなかった『高等学校現代国語一 改訂版』(昭和五〇年に
学校図書から刊行)、『新訂現代国語2』(昭和五二年に教
育出版から刊行)、『最新現代国語2』(昭和五五年に教育
出版から刊行)、『高等学校国語I』(昭和五七年に学校図
書から刊行)においても同様の箇所に表現変更

を発見した。なお、この表現変更は『新国語I』
(昭和五四年に三省堂から刊行)にて「セメン
ト樽の中の手紙」の全文が掲載されたのを皮切
りに、『新国語I』(昭和五七年に三省堂から
刊行)以降は変更が行われなくなっている⁶⁾。
また、これも従来指摘されてこなかったが、児
童向け書籍として出版された成城国文学会編
『中学生の文学・11セメント樽の中の手紙』(昭
和四四年四月にポプラ社から刊行)や成城国文
学会編『中学生の文学・11野菊の墓』(昭和五九
年四月にポプラ社から刊行)などでは、該当部
分の一切が削除されていることを確認した。以

上のことを踏まえると、教科書や児童書において、昭和四四年（教科書としては昭和四八年）～昭和六〇年までの間、該当部分の表現変更あるいは削除が行われていたと考えられる。私はこの表現変更及び削除によって、いくつかの問題が生まれるのではないかと考えた。

一つ目は、与三の家族に対する態度の描写をぼかすことで、手紙を読む前と後での与三の変化を捉えることが困難になるということだ。第一節でも述べたように、妻や子どもに対する与三の態度、それに伴う変化というのは、多くの研究がなされ、指導書でも様々な解釈を生んできた重要なポイントである。ここで、該当本文についての私の考察を述べておきたい。教科書にて変更があった「嬢は又腹を膨らかしやがつたし」、「滅茶苦茶に産む嬢の事を考へると、全くがっかりしてしまつた。」という描写からは、まるで与三が、子どもが生まれることを嬢のせいに行っているようにも感じられる。出産、多産は決して嬢ひとりの責任ではない。しかし、手紙を読む前の与三は、夫婦や子どもとの問題に向き合おうとせず他人のせいにする否定的な男であった。しかし手紙読後の与三は「細君の大きな腹の中に七人目の子供を見た。」と描かれていることから、子どもの存在や現実を見つめるようになっていいると考察できる。しかしこうした考察も、描写をぼかされることで読み取ることが難しくなる。そもそも

も本文に描かれる家族の描写が少ないことを考えると、やはり、妻に関する描写があった方が変化や対比が強調されるのは確実だろう。

二つ目に、「大正の空気感」が失われてしまう可能性である。葉山嘉樹がそういった描写をしていたことは、妻や子どもに対する暴言も、大正末の労働者であれば出てきてもおかしくない発言だったと考えられる。そういった当時の労働者の率直な言葉を書き換えることで「セメント樽の中の手紙」で学べるはずの「大正の空気感」が薄まってしまっているのではないだろうか。私は、「セメント樽の中の手紙」を正確に読解するために、与三の発言や描写を変更するべきではないと考える。では、このような表現変更はなぜ行われたのだろうか。

二・二 表現変更と時代背景

その大きな理由として、時代の風潮が関わっていたことが推察される。ここで、「セメント樽の中の手紙」が誕生した大正一五年前後の日本の出産状況とそれに関わる考え方について触れておきたい。この時代は、人工急増に伴って「産児調節」の議論もなされていたが、それは「人口問題の根本解決策が達成せられない間だけに用ゐるままならぬ浮世の止むを得ざる手段」（小池四郎『非資本主義的人口論 産児

調節ノ価値ニ就テ』(大正一五年、クララ社、二六頁)と一般にはされていて、妊娠や出産に関して女性の立場を保護する発想は希薄である。

また、江原由美子「女性問題と人口問題―女性学的観点から―」(平成四年一二月『季刊社会保障研究』所収、二六二頁)は、一九一八年から一九一九年のいわゆる「堕胎」論争と呼ばれる論争を取り上げつつ、女性の立場を擁護する伊藤野枝ですら避妊には賛成であるものの、堕胎に強く反対していたことを指摘するとともに、山田わかが次のように述べていたことを紹介している。

今日の処では、私達は社会によつて育てられ、又社会のために働かねばならない(……)。つまり、自分一人を守つて社会を無視して居たのでは、人間が生きて居る目的なる幸福を得ることは、とうてい出来ません。(……)こう考へて、私は堕胎も避妊も等しく大きな罪悪だと申します。個人の幸福、並びに国家の榮を破壊する大きな不徳です

このように、女性が妊娠・出産・避妊・堕胎を自己決定することも、相当地に困難な時代であつたと考えられる。

それに対して、「セメント樽の中の手紙」が教科書で学ばれるようになった昭和四〇年代は、妊娠や出産に関して女性の権利を主張する声が、勿論、それ以前からも全く存在し

なかったわけではないにせよ、「セメント樽の中の手紙」が発表された大正一五年当時よりも強くなっている。

実際、江原由美子前掲論文(二六八頁)では、「70代半ばにおいて、「リプロダクティブ・フリーダム」の思想が日本の女性運動においても広範な支持を得るようになった。」と述べており、「女性の自己決定権」は、そのときどきの人口政策によってふりまわされるものではなく、基本的権利という規範問題として(「人権として」認識されるべきものであることが、示され」(二六七頁)るようになった時代だとしていた。榑ひとみ「戦後日本の子育て・子育て支援の社会史・高度経済成長期を中心に」(平成二九年『子ども発達臨床研究』所収、一一三頁)でも、戦後から昭和五〇年ほどまでの家族体制について「子どもの数が減少して、一夫婦あたり平均二人強になったという人口学的変化」、すなわち「少数の子どもに愛情と手間をかけて育てるという、近代家族の子ども中心主義の人口学的基盤」が生まれたと先行研究(7)からまとめており、さらに、石川洋子・大塚明子「父親像の変遷に関する研究―育児雑誌の分析―」(平成九年『研究紀要』(文教大学女子短期大学部)所収、八〇頁)では、一九七〇年代に関して「家族の平等感や女性の自立志向が強まり、従来の強い父権主義が通用しなく」なった時代であるとしていた。すなわち、女性や子どもの人権に焦点が当

てられていた時期であつたと言えよう。

では、女性の人権を軽視し、出産の責任を女性に押し付けるような与三の態度はどうだろうか。私としては、女性に避妊や堕胎の選択権が乏しかった時代であればなおさら、夫である与三が妻の妊娠に責任を持つべきではないかと思われる。女性による出産の自己決定が今よりも難しい時代であるのでかえって、その女性に対し「滅茶苦茶に産む嬢」と評するのは、やはり与三が夫であり父親である自分に向き合っていないということではないだろうか。宮坂靖子「近代における避妊の受容と家族の情緒化―1920年代を中心とした女性雑誌の言説分析―」（平成二十二年『一般社団法人日本家政学会研究発表要旨集』所収）より、とある一文を紹介したい。一九二〇年代の雑誌記事にて「産児調節の成功と失敗は妻よりも良人の責任である」とあり、避妊が女性ではなくむしろ男性（夫）の責任であるというメッセージが発せられている。（二六七、二七〇頁）との記載があつたということを書いておく。

女性の身体的・経済的な負担にも配慮しながら、妊娠・出産の計画を立てていくことが望ましいと少しずつされるようになった一九七〇年代において、妊娠や出産をめぐる女性の権利が十分に確立していなかった時代ならではの思想を教科書に載せることは教育上適してない。そうした考え

から、与三の妻に対する発言を変更あるいは削除したのではないだろうか。

二・三 初の全文掲載と改訂された指導要領

なお、本節の冒頭でも既述したが、「セメント樽の中の手紙」の全文を初めて教科書に掲載したのは三省堂より刊行された『新国語Ⅰ』である。『新国語Ⅰ』の指導書である『新国語Ⅰ…指導資料』（8）（二二三頁）の出典には「本教科書では、筑摩版全集を尊重しつつも、作者が手を入れたと思われる有力なテキストをも参照して本文を定めてみた。仮名遣い、漢字表記、送り仮名は現行に従う。本文はむろん全文を収録してある。」と記載されており、本文の変更や削除を行っていることがわかる。他出版社の先駆けとなつて全文を載せた意図としては、同書で次のように記述されていた。

筑摩版『葉山嘉樹全集 第六卷』の年譜には、没後の関連事項も添えられており、昭和四八年度から高校現代国語教科書に「セメント樽の中の手紙」が収められた一件までも記されているほどの綿密さで目を見張られるのだが、実はそれ以前、検定外の副読本などところにすでにこの作品は収められていたということも忘れてたくない。確かに、「現代国語」の中に堂々と登場してきたことは意義のあることではあった。しかし、それは

真に堂々としていたか。否、であつた。A社・B社ともに「チエツ！やりきれねえなあ」の次の「かかあはまた腹を膨らかしやがつたし、……」はないし、「彼はうようよしてる子供のことや、またこの寒さを目がけて産まれる子供のこと」の次の「や、めちやくちやに産むかかあのこと」もないのである。自主規制という点で偶然に一致していたわけだ。（中略）こうした事柄を含めて考えるなら、高校の教材として立ち現れるまでに受難の歩みをこの作品はしてきたことがわかる。

「現代国語」の最後の段階で登場した三省堂版『新国語1』でようやくこの作品は、文字通り堂々と登場できたのである。筑摩版全集の完成という背景も一方にはあつた。つまり、前述A社・B社のころは、『現代日本小説体系40』（昭26）や『現代日本文学全集38』（昭29）によらねばならなかった段階だった。だからといって本文の改変が許されるということにはならないわけだが。教科書といえども——というより、なるがゆえに——最良の本文が使われるべきだということはいうをまたないことだろう。（二四八頁）

この記述から三省堂が「最良の本文」である「セメント樽の中の手紙」の全文を載せることが教科書にとって最適だと考えていたことがわかる。それまで削除・変更が行われて

きた本文の解説には、「かかあ」以下は、避妊法の発達していなかった時代の庶民の通例として、はつきりさせておく必要がある。あとの「めちやくちやに産むかかあ」とともに「時代」をとらえる手がかりとなることば。（二三〇頁）とあてていた。「最良の本文」が教科書に適しているという考えとともに、大正一五年の空気感も尊重していたのだろう。

また、この全文掲載が行われた近年で学習指導要領の改訂があつたことを確認した。改訂は昭和五三年^⑨に行われており、この改定によつて「現代国語」^⑩にまとめられていた国語科目が「国語Ⅰ」「国語Ⅱ」「国語表現」「現代文」に分化された。「セメント樽の中の手紙」は主に「国語Ⅰ」で掲載されているため、この後は「現代国語」^⑩と「国語Ⅰ」とで比較を行っていくものとする。まず、「国語Ⅰ」についてであるが、高等学校学習指導要領「総則」の第三款、各教科・科目の履修^⑪より「すべての生徒に履修させるもの」とされており、また「現代国語」^⑩では「A 聞くこと、話すこと」「B 読むこと」「C 書くこと」の三領域で分けられていたところが、「国語Ⅰ」では「A 表現」「B 理解」の二領域と「言語事項」という区分に分けられていた。この「国語Ⅰ」の立場について、馬淵和夫、大矢武師の『改訂 高等学校学習指導要領の展開 国語科編』（昭和五三年、明治図書）では、

「国語Ⅰ」は教科の目標を全面的に受ける総合的な科目であって、原則として第1学年において履修させる必修科目である。中学校国語との関連を一層密接にし、高等学校国語の基礎を固めるため、45年告示学習指導要領の「現代国語」と古典に関する科目との基本的な内容を整理して内容が構成されており、内容構成に当たっては、領域区分を、

A 表現

B 理解

〔言語事項〕

という、いわゆる2領域1事項とした。小・中・高等学校を通ずる一貫性を図ったものであり、国語科の教科構造の基本を貫いている。(五八頁)

としている。そして、この「B 理解」の内容で「現代国語」(10)と異なる事項を発見した。それは「A 話や文章の主題や主旨を叙述に即して的確にとらえること。」と「エ文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと。」という二つの項目である。これに類似する項目として、「現代国語」(10) B(1)のAにて「主題や主旨を的確にとらえ、それについて自分の考えを深めること」という事項、「現代国語」(10) B(1)のオにて「作品に描かれた情景や人物を豊かな想像力をもってとらえること。」という事項を

発見した。これらを比べてみると、「現代国語」(10)の項目に比べて、「国語Ⅰ」の「B 理解」の方が、叙述や表現に即して捉えることを重視していることがわかる。このそれぞれの違いについて、前掲の『改訂 高等学校学習指導要領の展開 国語科編』では、

（「国語Ⅰ」BのAと「現代国語」B(1)のAを）比べる
と言語の教科としての特色が強く出ている。すなわち、「叙述に即して的確にとらえること」をねらいとし、話や文章を字句や表現に着実に注意してとらえさせようというのである。（中略）

主題や主旨を的確にとらえるためには、文章の叙述から離れず、内容を正確に読み取ることが先決である。

（一一〇、一一一頁）

「豊かな想像力をもって」ということは、豊かな想像力をはたらかせてイメージとして思い浮かべさせるの意味だが、これは指導がむずかしい。

想像力をはたらかせてイメージ化させるためには描写に注意してこまかに読み味わうことが先決である。そしてそういう指導ならば可能であろう。

「想像力」をやめて「表現に即して」に改めたのは上のような理由であって、このあたりにも「言語の教育としての立場」を尊重した今回の改定の主旨が生かされ

ている。(一二三頁)

と論じられていた。国語が言語の教科であることから、本文に忠実にとらえる必要があるということと、「豊かな想像力」による指導は難しいため表現に即する方がベターということであるが、そうなると、やはり本文は完全なものである必要が出てくるのではないだろうか。この節の前半でも述べたように、僅かな描写の違いで考察の幅は大きく違ってしまう。叙述や表現にこだわるためには、まず「最良の本文」であることから始めなければならないだろう。三省堂の『新国語Ⅰ』で全文が掲載された背景として、この学習指導要領の改訂が関連しているのではないだろうか。

三 教科書における「与三の変化」の扱いの変化

最後に、第一節でも簡単に触れた「時代が進むにつれて「与三の現実や変化を読む」ことの取扱いが少し深まった」ともとれる部分を発見した「ことについて論じたい。第一節において私は、様々な議論がありつつも、従来の高等学校国語教科書では「女工と労働者の連帯」を主題に置くことがスタンダードであったことを明らかにした。昭和四七年から平成一九年まで三〇年余りの「学習の手引き」を確認しても、女工や労働者の連帯に関して問う設問と与三自身やその変

化について問う設問（第一節『高等学校現代国語Ⅰ』準備を参照）の比重にほとんど変わりは見られなかった。しかし、それらの指導書において気になる点を発見したのである。まず、私が確認した高校教科書指導書を挙げておくと次表二の通りである。

大きく違いがあったのは、学校図書から刊行された『高等学校現代国語一改訂版』（昭和五十一年に刊行）と『高等学校国語Ⅰ改訂版』（昭和五五年に刊行）に対応する指導書で提示されていた主題である。前者の指導書である前掲の『高等学校現代国語：教授資料』にて、主題で次のような表現がされていた。(二四〇頁)

被抑圧階級として現実の中に生きている労働者に対して、同じ階級に属している立場から連帯を呼びかけ、そこに労働者の生存のよりどころを求める女工の心情。

（この作品は、単に、当時の下積みの労働者の状況やその生活現実をリアリスチックに描いたものではない。

松戸与三は、そうした労働者の一典型として描かれてはいるが、その悲惨な現実主題があるのではなく、女工の呼びかけそのものに主題がある。（中略）主題というと、資本主義社会における搾取される階級としての労働者の悲劇をとらえる生徒もいよう。こうした図式的、観念的なとらえ方は、思想性の強い作品であるだけ

表 2 確認した高校国語教科書指導書等一覧

発行年	発行者	指導書名
1976(S.51)	学校図書	高等学校現代国語：教授資料
1980(S.55)	教育出版	最新現代国語：教授資料
1982(S.57)	三省堂	新国語Ⅰ：指導資料
1985(S.60)	学校図書	高等学校国語Ⅰ：教授資料
1985(S.60)	三省堂	新国語Ⅰ：指導資料
1985(S.60)	筑摩書房	国語Ⅰ：高等学校用：学習指導の研究
1986(S.61)	角川書店	総合国語Ⅱの研究
1988(S.63)	学校図書	高等学校国語Ⅰ：教授資料
1988(S.63)	三省堂	新国語Ⅰ：指導資料
1988(S.63)	大修館	高等学校新国語Ⅰ：教授資料
1988(S.63)	筑摩書房	国語Ⅰ：高等学校用：学習指導の研究
1989(S.64/H.元)	角川書店	総合国語Ⅱの研究
1991(H.3)	学校図書	高等学校国語Ⅰ：教授資料
1991(H.3)	三省堂	新国語Ⅰ：指導資料
1991(H.3)	大修館	高等学校新国語Ⅰ：教授資料
1992(H.4)	角川書店	総合国語Ⅱの研究
1992(H.4)	第一学習社	新国語二：指導資料集、評価問題集、原文集、基本問題集
1994(H.6)	大修館	高等学校新国語Ⅰ：教授資料
1994(H.6)	大修館	高等学校新国語Ⅰ：教授資料
1995(H.7)	角川書店	高等学校国語Ⅱの研究：教授資料
1995(H.7)	第一学習社	高等学校新編国語二：指導と研究
1998(H.10)	大修館	高等学校新国語Ⅰ：指導資料
1999(H.11)	角川書店	高校生の国語Ⅱの研究：教授資料
1999(H.11)	第一学習社	高等学校新編国語二：指導と研究
2003(H.15)	大修館	国語総合：指導資料
2007(H.19)	大修館	国語総合：指導資料
2007(H.19)	筑摩書房	国語総合：学習指導の研究

に、いつそう慎みたい。」
この記述から、『高等学校現代国語「改訂版」では与三自身や与三の置かれた現実に関して深い読み方をしないといった姿勢が見て取れる。しかし、『高等学校国語Ⅰ改訂版』に対応する指導書『高等学校国語Ⅰ…教授資料』（昭和六〇

年、学校図書、三〇〇頁）では、主題の設定が次のようになされていた。

恋人を事故で失った女工からの手紙によって、その訴えと呼びかけに目覚める下積み労働者や与三の姿と、呼びかけを通して同じ労働者への連帯を求め、そこに

生存の根拠を見いだす女工の心情を描いた作品。（この作品は、松戸与三という下積み労働者の姿と、恋人をクラッシュヤーによって粉々にされて失ってしまった女工の手紙によって構成されている。この作品の全編を貫いているのは、下積み労働者・被抑圧階級として現実を生きねばならぬ者たちの悲惨な姿である。）

ここで注目すべきは、（ ）で括られている主題の詳細部分である。両者とも「女工と労働者の連帯」を主題に置いていることに変わりはないが、その「与三」の読み方に大きな差がある。前者は、「与三」をあくまで「女工と労働者の連帯」を示すために登場させた一労働者として扱っているのに対し、後者は労働者である与三自身や与三の置かれた現実にも触れているのである。また、教育出版か

ら刊行された『最新現代国語2』（本文異同有り）の指導書『最新現代国語…教授資料』（昭和五五年、教育出版、二〇頁）においては、与三の変化が描かれる第三段の読みを「第三段落のどの文章もほとんど与三の心理を説明しない。読者は与三の行為からその心理をはからねばならない。一体与三の見たものは何であつたか。七人めの子供に何を見たのであろうか。」としており、詳しい解説を行っていない。『高等学校現代国語一改訂版』と『最新現代国語2』の刊行年より、一九七〇年代から一九八〇年頃までは「与三」に関して突き詰めた読みがされていなかったということである。しかし、『高等学校国語I改訂版』など一九八〇年以降の教科書では「与三」についても多種多様な読み（第一節で指導書によって「与三」の読みが様々であつたことを指摘）がなされるようになっていく。

一九七〇年代から一九八〇年までの間に、「セメント樽の中の手紙」の新たな読み方の研究がされていたのかもしれないし、あるいは三省堂『新国語I』が一石を投じた可能性も、もしかしたらあるかもしれない。第二節でも述べたように、全文を掲載するということは「与三の変化」や「与三の現実」、「大正の空気感」がより読み取りやすくなるということである。学校図書出版においては、『高等学校I』（平成六年に刊行）にても同様の本文異同を確認してはいるが、そう

であつても一九八〇年代に一度主題を改めたということがある。他出版社の流れから与三を、ただ手紙を読んだ一労働者とするのではなく、与三自身を読み解くことも必要であると考へたのかもしれない。なお、『高等学校国語IIの研究…教授資料』（平成七年、角川書店、四七頁）では、

手紙を読んだから、その思想と行動が急激に変わるわけではない。しかし、手紙の与えた感動は、与三に少しの変化を与えている。

長屋へ帰る場面「彼はウヨウヨしてる子供のことや、またこの寒さを目がけて産れる子供のことや、めっちゃくちやに産む嬢のことを考えると、まったくがつかりしてしまった。」と、手紙を読み終えたあとの場面「松戸与三は、沸き返るような、子供たちの騒ぎを身の回りに覺えた。……彼は、細君の大きな腹の中に七人目の子供を見た。」とを対比させることができる。ヒューマンな手紙に感動し、子供や七人目の子供を妊娠する妻を肯定的に見つめる目が描かれている。

と記述されており、やはり全文が載せられるようになったことで、表現変更がされていた部分と第三段を対比することができるようになり、「与三の変化」の読み方、ひいては「セメント樽の中の手紙」という文学作品の読みが深められたということがあるのではないだろうか。

結論

「セメント樽の中の手紙」を国語教材として研究したとき、そこには時代の流れや風潮とともに教材としての歴史が着実に刻まれてきたことがわかった。

第一節では、その読まれ方についての調査結果を示した。まず先行研究を参照し、これまで「労働者と女工の連帯」と「与三の現実、与三の変化」といった「セメント樽の中の手紙」の主題となるテーマについて議論がされてきたことを記した。そして中野氏が、実際の授業においては「女工と労働者の連帯」が主題とされていたと述べていたことについて、私は教科書の手引きや指導書を参考にその実態を確認した。結果としては、圧倒的に「女工と労働者の連帯」に主題が置かれてきたというものであった。一方で、「与三の現実、変化を読む」ことについては指導書によって扱いが様々であり、議論の余地を残すようであった。そういった点で、教科書教材としては「プロレタリア文学」であるという枠組みや「女工と労働者の連帯」といった明確なものが主題に置かれてきたのではないかと考察した。

第二節では、教科書における本文異同を調査した。削除・変更が行われていたのは、「嬢は又腹を膨らかしやがつたし」、「滅茶苦茶に産む嬢」という部分である。これについて、

まず、削除・変更をすることによる問題点を指摘した。与三の家族に対する描写をぼかすことで、与三という人物への読みや家族についての読みが浅くなってしまうのではないかとということと、与三の率直な発言を削ることで大正ならではの空気が薄れてしまうのではないかという懸念である。その後、そういった本文異同がなぜ行われたのかという理由について、「セメント樽の中の手紙」が発表された大正一五年という戦前の時代と、教科書に収録されるようになった昭和四〇年以降という戦後の時代の時代背景や風潮の変化を比較して考察した。大正一五年当時の日本では、女性は妊娠・出産・避妊・堕胎を自己決定することが難しい時代であった。与三の女性を軽視するような発言や父親としての責任を自覚していないような発言も、そういった時代であったからこそ生まれたものであろう。しかし、昭和四〇年代以降の日本において、それは教科書に掲載するのに相応しくないものであった。女性の人権が尊重され、女性の自立や家族の平等といったことが少しずつ言われるようになって昭和四〇年代以降に、与三の発言は適切でないとして本文の削除・変更が行われたと考察した。さらに、「セメント樽の中の手紙」の全文を初めて教科書に掲載した、三省堂『新国語Ⅰ』の立場についても調査結果を記述した。

そして、第三節では第一節と第二節を踏まえて、本文異同

が教科書教材「セメント樽の中の手紙」に与えた影響の可能性について論じた。『新国語Ⅰ』によって全文が掲載されたことで、「与三」についてや「嬢は又腹を膨らかしやがつたし」、「滅茶苦茶に産む嬢」と比較される第三段についての考察が深まったという可能性である。もちろん、ただ時期が近いだけという可能性や、「与三」や第三段について新たな研究結果、見解が示されたことも考えられる。しかし私としては、本文全文を収録することには確かに意味があったと考えているので、そういった可能性を記しておきたい。

「セメント樽の中の手紙」は葉山嘉樹によって大正一五年に『文芸戦線』で発表され、昭和四〇年代に高等国語教科書に収録されてから今日まで、文学作品として、教科書教材として数多くの研究がなされてきた。作品本文は端的であるにも関わらず、一度読めば大きな衝撃を残していくものである。文壇を驚かせた葉山嘉樹の文学作品は、今後も国語教科書に収録されていくと思われる。「プロレタリア文学」という枠組みから読む女工と労働者の連帯」と「プロレタリア文学」という枠組みによらない与三自身の描写」。解説が明確で簡潔である前者と解釈が大きく分かれ幅の出る後者。今後教科書教材としてどういった読みや指導がされていくのか、あるいは一つの文学作品としてどのような研究がなされていくのか大変興味深く思う。

注

(1)『文芸戦線』で発表されて以降「セメント樽の中の手紙」は、様々な書籍に掲載されるようになる。本文異同があくまでも教科書や児童向け書籍でのみ行われたものであるかを確認するため、以下の書籍の本文を調査した。なお、全ての本文に異同は見られなかった。

葉山嘉樹『淫売婦』(大正一五年、春陽堂)／『新選葉山嘉樹集』(昭和三年、改造社)／葉山嘉樹『労働者の居ない船』(昭和四年、改造社)／『新興文学全集第7巻』(昭和五年、平凡社)／葉山嘉樹『仁丹を追つかける』(昭和五年、塩川書房)／文芸家協会編『日本小説集昭和2年版』(昭和六年、新潮社)／『明治大正文学全集』(昭和七年、春陽堂)／『葉山嘉樹全集』(昭和八年、改造社)／日本近代文学研究会編『現代日本小説大系第40巻』(昭和二六年、河出書房)／『現代日本文学全集第38』(昭和二九年、筑摩書房)／野間宏『日本プロレタリア文学大系(2)』(昭和二九年、三一書房)／日本近代文学研究会編『現代日本小説大系第四二巻』(昭和三〇年、河出書房)／奥野信太郎等編『世界短篇文学全集第16』(昭和三八年、集英社)／伊藤整等編『日本現代文学全集第73』(昭和三九年、講談社)／『現代文学大系第37』(昭和四一年、筑摩書房)／『葉山嘉樹全集第一巻』(昭和五〇年、筑摩書房)／大西巨人『日本掌編小説秀作選Ⅰ雪・月篇』(昭和五六年、光文社)

(2) 藤本晃嗣「セメント樽の中の手紙」授業実践―異なる〈読

み」を体験するための教材として―(平成三〇年、『米子工業高等専門学校研究報告』では、プロレタリア文学という枠組みの有無で、作品の解釈が変化し得るかを学生に体験させるという授業を試みたことを報告している。

- (3) 小野牧夫前掲書にて、「学校図書出版の『高等学校現代国語一』(昭和四八年)には本文の部分削除」と記述されていたが昭和四八年発行のものが入手できなかったため『高等学校現代国語一』(学校図書、昭和四七年)にて確認を行った。

- (4) 紀伊國屋書店の内容説明より「高校国語教科書に載った作品を網羅。1949〜2006年刊の教科書から小説・戯曲・評論・随筆・詩・短歌・俳句・古文・漢文などの作品をすべて掲載。国語教育の潮流を一望。図書館のレファレンス業務にも役立つ一冊。」と紹介されている。

- (5) 教科書の本文異同が、いつどの教科書に行われていたのかを確認するため、「セメント樽の中の手紙」の掲載を確認した昭和四七年〜平成一九年までの高等学校国語教科書の本文を調べた。本文異同の有無についての調査結果は表1にまとめている。また、本文異同の内容は、本文異同が行われていた全ての教科書で共通であった。

- (6) ただし、学校図書出版の教科書に関してのみ『高等学校国語1』(平成六年、学校図書)まで表現変更の継続を確認した。よって、表現変更が行われなくなった時期を考える際には学校図書出版のものを例外的に扱う必要があると思われる。

- (7) 落合恵美子『21世紀家族へ』(平成六年、有斐閣)、落合恵美子『世界の中の戦後日本家族』(平成一七年『日本史講座 戦後日本論』をまとめている。 10

- (8) 本書は、昭和五七年に三省堂から刊行された。なお、三省堂にて全文を初めに掲載した教科書は『新国語I』(昭和五四年に刊行)であるが、それに対応する指導書を入手することができなかったため、『新国語I』(昭和五七年に刊行)に対応する指導書を使用している。『新国語I』(昭和五四年に刊行)と『新国語I』(昭和五七年に刊行)の間に改定などは行われていないため、指導書に関しても内容は同じであると思われる。

- (9) 高等学校学習指導要領(昭和五三年八月)より。
(10) 高等学校学習指導要領(昭和四五年一〇月)より。

参考文献

渥見秀夫「セメント樽の中の手紙」論(平成一二年、『愛媛国文と教育』)

浦西和彦『葉山嘉樹―考証と資料』(平成四年、明治書院)

加藤邦彦「届けられた手紙、送られる返信―葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」論」(平成二四年『梅光学院大学論集』)

亀井辰朗『三省堂書店百年史』(昭和五六年、三省堂)

北川秋雄「セメント樽の中の手紙」題材考―前田河広一訳『ジャングル』との関係について―(平成一六年、『同志社国文学』)
棚沢健「プロレタリアのお化け―葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」

―(平成一〇年『国文学研究』)

小池四郎『非資本主義的人口論 産児調節ノ価値ニ就テ』(大正一五年、クララ社、二六頁)

国際協力事業団『第二次人口と開発援助研究―日本の経験を活かした人口援助の新たな展開―』(平成一五年、国際協力事業団国際協力総合研修所調査研究第二課出版)

成城国文学会編『中学生の文学・11セメント樽の中の手紙』(昭和四四年四月、ポブラ社)

成城国文学会編『中学生の文学・11野菊の墓』(昭和五九年四月、ポブラ社)

西尾実・猪野謙二『現代文学選』(昭和四二年三月、秀英出版)

日本教職員組合編『日本の教育第十四集』(昭和四〇年六月、一ツ橋書房)

日本教職員組合編『日本の教育第十七集』(昭和四三年六月、一ツ橋書房)

日本教職員組合編『日本の教育第十八集』(昭和四四年六月、一ツ橋書房)

日本教職員組合編『日本の教育第二五集』(昭和五一年六月、一ツ橋書房)

日本教職員組合編『日本の教育第三三集』(昭和五九年六月、一ツ橋書房)

日本教職員組合編『日本の教育第三四集』(昭和六〇年六月、一ツ橋書房)

日本文学協会国語教育部会編『講座／現代の文学教育4巻(中学・

高校)小説編』(昭和五九年五月、新光閣書店)

長谷川泉『セメント樽の中の手紙―現代文の鑑賞・その七―』(昭和二八年、『国文学』)

藤本晃嗣『セメント樽の中の手紙』授業実践―異なる〈読み〉を体験するための教材として―(平成三〇年、『米子工業高等専門学校研究報告』)

付記

「セメント樽の中の手紙」の引用は『文芸戦線』(大正一五年、文芸戦線社)による。その他、文献の引用に際し旧字を新字に改めた。

(いとう・あおい 令和二年度本学卒業生)